九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

非定型という型をめぐって

荒木, 正見
九州大学哲学会会長・地域健康文化学研究所理事長

https://hdl.handle.net/2324/1397629

出版情報：藝術と自由. (285), pp.10-11, 2012-11-01. 芸術と自由社
バージョン：
権利関係：

非定型という型をめぐって

荒木正見

新短歌を中軸として、非定型短歌の流れはすでに歴史の中に根付いているといってよい。しかし他方、創作する側に立てば最も根本的な問いから逃れ得ないことに気づく。それは、非定型とはどのような型であるのかという問いである。これは非定型歌が誕生して以来、常に問われてきたことでもある。このことについて私見を述べさせていただきたい。

筆者は十代の終わり頃に非定型歌に出会い、それからかれこれ五十年間、気がついてみればそのことばかり悩んできたといっても良い。哲学や文学、心理学から、スポーツ科学にまで手を伸ばしては来たものの、中心に哲学を置き、哲学者として生きてきた以上、主要なテーマは単純である。それは「あるということ。」である。他の方々が普通に存在すると捉えている事柄に対して、まずはその事実を認めた上で「否、待てよ。」ともう一段階考え込む。それゆえに、内容は複雑になり、字数も多くなり、少なくとも短歌本来のさわやかな形式をはみ出してしまう。

これが定型なら事は簡単である。型からはみだしそうな内容を捨てればよいのである。もちろんそれにはそれの決断と選択、象徴化への苦労があるのは当然ではあるが、そのことを前提として取り組んでいるので、無意識的にそれらを実行しているという気兼ね無さがある。ところで、筆者自身が非定型に拠った理由のひとつが、はみ出しそうな内容を捨てなくて良いのではないか、ということなので厄介である。

さて、「何でも好きなように表現できる。」このことはすばらしいことではあるが、実は大変難しいものであることを、多くの方は感じておられるのではないか。指折り数えて三十一文字の中に入れてしまったほうが楽なのでは、と迷っておられるのではないか。

時に実験することがある。

はじめに「何でも思いついたことを二十字以内にまとめよ。」と指示する。出来上がった作品を一通り説明して頂いて多少のコメントを加え、その作品のテーマや深層の意味を確認した後に、「何でも良いから十から二十字程度の言葉を付け加えよ。」と指示する。そこで付け加えられて完成した作品を見ると、ほとんどが、当初の二十字の内容を超えて一歩踏み出している。創作が自己を成長させるといわれる所以である。

これを定型で試みるとどうなるのか。

「何でもよいから五七五で表現せよ。」と指示し、出来上がった俳句や川柳を一通り説明して頂いて多少のコメントを加えてその作品のテーマや深層の意味を確認した後に、「では七七を加えよ。」と指示する。やはり同様に当初の内容を超えて一歩踏み出した作品に仕上がるが、非定型と比べると始めの五七五のテーマを絞り切ったものが多い。要するに、テーマへの求心性が高まるのである。

このことは一般的な心理としても言えることである。形式があるから、規則があるから緊張感を持って必要なことに絞って行動するというのが人の常である。そしてその規則があるから秩序が保たれる安心感を得ると共に、規則が厳しすぎたり煩雑すぎたりすると逆に発達を停め生存力を失う。昭和初期における新短歌運動の先達たちの作品からは、それまでの短歌にそれを感じたということもあるのかもしれないが、むしろ大正デモクラシーの終焉という社会的閉塞感に一矢を報いようとしたことがテーマから見て取れる。

さて、いまやどちらが正しいかを議論する時代ではない。どちらも並立することが真理

である。倫理学において人類の生存に関する危機管理の原則の一つに多様性の原則というものがある。すなわち未知の危機、想定外の危険が迫ったときには、それまで常識的に思っていた知識ではないことが必要になる。人類は他の生き物に比して圧倒的な情報伝達力を持っているので、たったひとりでも、それまでの人が知らない、従って何の役に立つのか分からないと思われていた知識を持ったものがいれば、その知識を伝え合って未知であった危機に対応することが出来る。もちろん現実的には、未成年者には伝えられない情報があるように、社会的経済的事情に応じて、伝えることが当座の社会の生存にマイナスになるのならそれなりの制限が加わるし、実行すると人類の生存の危機を招きかねない知識は絶対に実行しないという条件も加わるが、基本的には知識の多様性は守られねばならないというのがこの多様性の原則である。芸術表現の自由は、深層ではこのような原則に守られている最たるものであることはいうまでもない。となれば、ありとあらゆる種類の文学表現が並列することはいわば当然である。

このように非定型歌の生存基盤は守られるが、それに甘えていてはならない。芸術作品である以上、芸術的に表現しなければならない。この「芸術的に」が最低限の型である。それは内容を含むのかと問われれば、まさに内容の問題であると答える。哲学者ヘーゲルも述べるように、内容が形式を規定するのである。形式だけに目を向ければ、定型歌で指折り数えるようになにか枠を作る。先に実験したようにそれが定型歌の良さであるが、そのことをはみ出したい内容があるから非定型を選んだはずである。

では表現上の常識はあるのかといえば、ゆるい常識はあるといえる。例えば「落ち葉が一葉」は「葉」の重複でくどい感じがする。一般的には避けるべきだがこのくどさや稚拙さをテーマにするとなればこのままでもよいかもしれない。このような技法上のことは定型、非定型を問わず指摘される通りである。抽象的なことばを羅列しない、テーゼを露骨に発言しない、など、豊かな情を持つ芸術性を高めるための数々の原則的な心得、これらは定型歌の歴史に学べば良い。あくまでもゆるやかな規則として。そのうえで、定型歌では表現できない内容を追求し、テーマの必然性に応じて規則を破ればよい。

ここに至って、問題は内容にあることが示される。それはテーマをどのように表現したいのかということと一体になる。そのひとつの手がかりが、実験で得た求心性である。表現したい内容の多くは情を絡めつつテーマを伝えたい意思を持つであろうし、時には情のみを伝えたい場合もあろう。それには、最後に求心性を持たせて締めくくればよい。しかし、そればかりを意識し過ぎて生硬な感じのテーマが露骨になり、まるでなにかのスローガンのようになりかねないと思えば、程よく緩めて余情をもって終わっても良い。この選択も、テーマ、すなわち表現したい内容による。

ここで至ったことは、内容を練りテーマを明確に絞り込むべきだということである。それは何を伝えたいかだけではなくどのように伝えたいかということと一体であるところがまさに芸術である。非定型ということは、この選択肢が無限に開かれていることを意味する。と同時にその分、テーマや内容との格闘が水面下で激しく行われなければならない。しかもそれは徹底的に個人的で孤独な工夫を伴う仕事である。テーマによってはだれにも分かってもらえないかもしれない。それこそがやはり芸術でもある。

かく、一層の鋭さをもって、相互に学びつつ、豊かな情感を伝えられればと自戒するのみである。